今を大切に生きるということ

相川　壮一朗

大好きだったばあばが、去年の十一月にな、くなった。ばあばはまだ六十五才で、死ぬには早すぎた。ばあばにはまだ行きたい所、食べたい物、見たい物があった。ぼくにもばあばとやりたいこと、やってあげたいことがたくさんあった。ばあばの病気が分かったのは、新がたコロナウイルスが流行っている時期で、子供は病院に入ることが出来なかった。ばあばのちりょうはとても大変で、たくさん注射をしたり、強い薬の副作用で気持ち悪くて、なにも食べられなかったり、とても苦しい思いをしてがんばっていた。会いにいって一緒に遊んだり、笑わせたりして、すこしでも楽にしてあげたかった。元気な時のばあばは、ぼくのお父さんやお母さんが仕事で忙しくなると、自分もかん理栄養士として働きながら、ぼくや弟をいっしょうけん命育ててくれた。やってもらったことに対して、やってあげら

れたことがあまりに少なすぎた。悲しくてつらくて、泣いても泣いても気持ちの整理がつかず、苦しかった時に読んだ本がクララ先生、さようならだった。

この本は、主人公のユリウスが、大好きな担任のクララ先生の死期が近づいている事を知り、大人の反対を押し切りながら、先生に手作りのかんおけをおくる話だ。読み終わった時ぼくは、ユリウスの事がうらやましくて仕方なかった。なぜならユリウスは先生が亡くなってしまう前に先生の事を笑顔にすることができたからだ。ぼくもばあばが亡くなる前に千羽づるを作り始めたけど、その時にはばあばはすでに意しきがなくて、完成する前にとくなってしまった。もっと早くばあばが亡くなることを知れていたら、病院のルールをやぶってでも会いに行ってだきしめてあげたかった。小さい頃から一緒にやった工作で遊びたかった。「大好きだよ、ありがとう」と伝えたかった。

ぼくは、間に合わなかった千羽づるを完成させることにした。ばあばと一緒に作っている時を想ぞうして、丁ねいに気持ちをこめて折った。お父さんやお母さん、弟、おばさんとばあばとの思い出を話し合いながら、一緒にも折った。これまでは、ばあばが死んでしまったことを出来るだけ考えないようにして過ごしていたけど、千羽づるを折ることでばあばの死にしっかりと向き合うことが出来たと今がいた。死と向き合うことは、とてもこわくてつらかったけど、にげずに向き合うことで、ばあばにプレゼントをわたせた気持ちになれた。

今、ぼくにはばあばのように大切な人がたくさんいる。いてくれるのがあたりまえで、けんかをしてしまったり、やさしさにあまえてしまう時がある。それはこの毎日が、ずっとずっと続くと思っているからだ。ばあばもの毎日もずっと続くと思っていた。入院したのもちりょうのためで、すぐに元気になって

帰ってくると思っていた。けれども人間は、いつかは必ず死んでしまう生き物だ。大切な人との別れがいつ来るかは分からない。別れを考えて生きることはあまりにつらすぎるけど、今かける言葉、行動を大切に、一日一日を、一しゅん一しゅんを、生きていきたい。

そして、ばあばには毎日こう伝えたい。「ばあば、今日もありがとう。ぼくは今日も大切な人を大切に生きます」。